

朝日新聞社

長谷川伸全集

第十二卷



よこはま白話

生きてゐる小説 石瓦混肴

長谷川伸全集 第十二卷

よこはま白話 ほか

全十六卷・第十五回配本

一三〇〇円

昭和四十七年五月十五日発行

著者 長谷川伸

発行者 朝日新聞社 角田秀雄

印刷所 凸版印刷

発行所 朝日新聞社

東京 大阪 北九州 名古屋

装幀 原 弘

帯挿画 岩田専太郎

長谷川伸全集

第十二卷

目次

よこはま白話

光村弥兵衛半生の変転	二
『国定忠次』の作者宝井馬琴	一九
異人揚屋岩亀楼その他	三三
高輪泉岳寺無名志士の碑	四六
木村重友と友衛および若衛	五
明治初期以来の役者たち	六六
幕末居留地の奇譚	八二
二人の敗残兵と二人の町医者	九五
ある舶来雑貨の商人	一二
人から人の一連の人々	二六
二世伯円と仙石左京の娘	三三

生きている小説

日本人義勇兵	一四七
敵討ち余録	一五五
一本刀土俵入	一七二
戦前戦後	一九〇
或るお金	二〇九
事実残存抄	二三三
人の心ごころ	二四二
元日とドイツ人	二四七
春興	二四八
世の中の人たち	二六九
戦塵備忘	二八三
耳めがね	二九三
続・耳めがね	三二〇

葬い代りの旅 三三六

悪い奴という人 三三七

北の女南の女 三四五

游俠雜抄 三六八

横浜・桑港 三七九

影なき人たち 四〇三

手簿の余白 四一五

托鉢の芝居 四二三

終戦とその後 四四二

行余のいろいろ 四五七

石瓦混肴 四七三

身辺語録 四七五

ひよんな話 四七五

処女作の思い出 四七八

黒いジョン	四八〇
キントン焼魚	四八一
親探しの話	四八四
身辺語録	四八九
明治は遠く	五〇三
小説・戯曲を勉強する人へ	五〇七
小説・戯曲を勉強する人へ	五〇七
劇・俳優・戯曲	五二〇
収拾録遺	五二一
師匠は八方にいる	五二四
故人の筆まめ	五二四
伝記の弊害	五三六
両名の義経	五三九
原始日本探偵小説	五三一

師匠は八方にいる

五三

芝居の面白さ不足について

五九

生活の知恵

五四

乗客の立場

五四

生活の知恵

五四

解説 村上元三

五七

よこはま白話

昭和二十八年一月―五月 神奈川新聞連載

光村弥兵衛半生の変転

横浜開港となりて間もなきころ、太田町の有名な人夫頭虎蔵のところへ、旅姿の見すばらしい男が来て、人夫につかってもらいたいといった。お前はどこの者だと虎蔵が尋ねると、田舎者ですと答えた。そんなら京音頭でも出来るかと虎蔵が尋ねると、その男は出来ますと答えた。ではと採用されて、その翌日、請負普請（建築）の敷地均しに差し向けられた。そのころの横浜は、一方では埋立をやり河川をつくり、その一方では家屋の建築が八方で急がれていた。漁村を市街に急造中であつたから、開港実施の足掛け三年目とはいえ、そのはずである。さて彼の男は地均しの現場へさし向けられ、人夫として仕事に就いてみると、役は木遣りの音頭取りであつた。ところがこの男は、地固めの胴突きにつかう労働唄など、まるで知らないのだから、忽ちのうちに進退谷ま^もって、逃げ失せてしまった。この男が後の光村弥兵衛である。

太田町の虎蔵は鈴村要蔵の部屋頭の虎蔵だと思ふ。要蔵は江戸の新門辰五郎・ハマの鈴村要蔵と並び称され、開港当時から明治初期にかけて有名な土木業者

で、その名は横浜関係の諸書に出ているが伝記はない。私の寡聞の故か、要蔵は神奈川台地の経師屋の倅で、はじめは船夫、それからハマに根を卸して華やかな一代だった、とその程度にしか知らない。私の義祖父で土木業の秀造の自伝、といつても素朴なものであつたが、篇中に要蔵との紛争など書いてあつたが、先年紛失して、今ここで、資料の一ツに残念ながら出来ない。要蔵と肩を並べたものに元町の政吉がある。清水喜助・原木仙之助などがある一方に、遊侠の徒には芝居小屋を最初に建てた佐野松、居留地の馬丁頭で通称ワンカ（楓兼）の大松、その後に綱島の小太郎、半鐘兼、埋地の千太などがあつたという。そのなかで曲りなりにも伝記的読み物があるのは、佐野松とワンカだけだと思ふ。それも横浜人の間でも知られていないだろう。

現場から逃げ失せたその男は、周防熊毛郡光井村の百姓水本源右衛門の子で、親がつけた名は利吉であつたが、二十三で製塩事業をやつて失敗し、二十六で故郷を飛び出した、そのときの名は重平。諸国をめぐり歩いて備中倉敷にいたときの名は広吉。二十七で江戸へ辿りつき米倉丹後守の足輕に雇われたときの姓名は井上甚八。それから佐々木という医者^{いしや}の僕となつたときの名は吉蔵。その後、築地本願寺前の床店^どで餅菓子売りから、桜田の毛利家（長州藩）の棟梁部屋の賄い兼掃除夫となり、やがて邸内の一隅で日用

品を売り、いくらか安定して来たところで、安政の大地震にあり、復興工事にあたって人夫頭をやったが、良かったのは二カ年で、江戸の復興が一応できてしまったので失業し、伊豆の下田その他を経て三十五で横浜へゆき、最初の仕事の前に行ったようなことで、現場から逃げ失せたときは吉蔵といっていたか、すでに弥吉といっていたか定かでない。

徳川時代は名を改変することが、面倒でなかったとはいえ、三十五年間に四、五たび名を変え、一度は姓まで変えたこの男は、後に神戸繁栄につくしつ、巨万の富を築き上げた長門屋弥兵衛である。長門屋は商号で、姓を後に新たに興して光村弥兵衛といった。

弥兵衛の子が光村利藻で、明治三大蕩鬼のひとりということにされ、ジャーナリズムが事あるごとに、面白おかしく書き立てたので、世間は蕩鬼にして無能なるもの、という印象を与えられたが、後に写真と印刷とに大いなる貢献をし、事業にも或る成就を遂げた。色彩写真印刷による古仏画孔雀明王はじめ、おびただしき作品は、東海一島国が世界に対して虹のごとき気を吐いたもので、じつにそれは光村利藻のやったことであつた。

光村弥兵衛は木遣り音頭ができないので、普請場から逃げた文久元年の春から横浜に居着き、慶応二年十月二十日の豚屋の火事で、横浜がほとんど焦土となったその翌年三

月、神戸に眼をつけて移り住んだ。だから横浜人であつた期間は三十五から四十一までで、わりに短い。鹿兎島藩島津家の士が、イギリス人を斬つた生麦事件の前年から、武田耕雲斎等が死刑に就き、武市半平太が自殺した次年までの、時が時だけに、そのころの横浜を知るには弥兵衛の伝記は、好個の物の一つである。

私がこんな話をするタネは『従六位光村弥兵衛伝』（中西牛郎・非売本）である。この本が編まれて、弥兵衛の知己の間にのみに頒たれたのは、明治二十七年（一八九四年）の冬であるから、私は数え年で十一であつた。したがつてこの本は頒たれてから五十余年の後に、古本屋さんから手に入れたものである。弥兵衛の詳伝が別に編まれているかどうか知らない。私はただこの一冊だけに拠つて、ところどころに余談を加え、ムダ話の一つに用いるのである。

光村弥兵衛が広吉と称していた二十七のときのこと。備中倉敷でもこれという生業が得られず、広島へ足を向けたが、気が変つて下関まで、行くことは行けたが、零凋孤苦、前途に望みを失つて自殺を思ひたち、鹿野の漢陽寺に死場所を定め、いざ死ぬとなると心機一転、生きて生きて生き抜く気になり、摂津尼ヶ崎まで漸く来たとき、聞き込んだのが相州浦賀にアメリカ艦隊が進入し、幕府との間にいつ戦争となるかも知れずということである。弥兵衛はト旗挙げる機会はこのときと、無理に無理して品川までたどりついたのが、嘉永六年七月中旬で、アメリカ艦隊はす

でに去った後であつた。落胆して翌日江戸に入ったとき、持っていたのは天保銭四枚のみ。日本橋までくると、従弟で毛利家の足輕入江信次郎に行き会い、その口添えで、麻布竜土町の人入れ渡世川崎屋吉平の寄り子部屋へ入れてもらい、その翌日、井上甚八と姓名を付けられ、米倉丹後守の足輕に雇われた。

米倉家は陣屋が、武州久良岐郡金沢の引越にある一万二千石の小大名で、弥兵衛が雇われたときの当主は米倉丹後守昌寿である。武州金沢に米倉家が館を構えたのは元禄九年（一六九六年）で、明治維新まで百七十余年間いたのだから、武州金沢と米倉家との関係は浅くない。それはさてとして、米倉丹後守昌寿は、そのころ大坂定番で京橋口の受持ちであつた。江戸の上屋敷は牛込見付の内にあつた。弥兵衛の奉公先はこの上屋敷の方で、市ヶ谷谷町の下屋敷ではなかっただろう。余計なことのようだが、米倉家は、中屋敷を江戸にもっていない。

足輕の俸給は一カ月一人扶持（一日につき玄米四合だが家々によつて多少違った）と金一分であつたが、金一分がそのまゝ本人の手にわたるのでなく、目付役と足輕頭とが半分とるので、本人の手に二朱しかはいらない。昔の武家奉公にはこうした悪弊があつた。その代り羽織袴と木刀とは貸してくれる、といつてもこれは、給金の半分を捲きあげる目付役や足輕頭が貸すのでなく、主家米倉が貸すのであ

る。しかし羽織も袴もボロで、木刀も剝げチョロのひどい物である。

足輕奉公して五日目、米倉丹後守が登城するので、弥兵衛の井上甚八は、先行の荒川静馬に随つて江戸城内に入り、供待所に控えていた。供待所には諸家の足輕が多勢いて雑談にふけていた。そのうちにキナ臭いので、多勢が騒ぎ出すと、忽ち一人の足輕が、弥兵衛の袂から薄く煙が出てゐるのをみつけ、煙草御禁制のここにて何のことぞ、役人に知られたら嚴罰に行われるぞと罵つた。弥兵衛は思ひもよらぬ袂の火事に、びっくりとともに、盛んに焦げている袂を片手で緊く握りしめ、城内から逃げて出て辰の口まで来たところ、それまでは夢中で心づかなかつたが、掌が焼け爛れているのに気がつき、又びっくりして濠の水に袂をひたし火を消した。これは弥兵衛の足輕振りをみて、新米不慣れと見てとつた何者かが、禁制を承知の上で、隠し喫みした煙草の吸いガラを、弥兵衛の袂へワザと棄てて困らせようとしたものと推定される。

このときは徳川十二代將軍家慶が危篤に陥つたときで、嘉永六年七月二十日の総出仕のときと考える。

『弥兵衛伝』のいうところでは、大坂勤務の米倉丹後守が登城のときとあるから、米倉は江戸へそのとき戻つていたとみえる。家慶は同月二十二日永眠し、次代の將軍は家定であつた。

弥兵衛は古羽織と古木刀とを、ひそかに米倉家の邸内へ

投げ込み、邸外で三拝九拝謝罪して姿を隠したというから、夜のことであったのだろう。その後、弥兵衛は医者（やく）の僕となり、やがて築地本願寺の辻番小屋の横店（よこだ）を月二分の損料で借り、餅菓子（もちこし）を売ったが、商売にならないので七日間でやめてしまった（横店は床店のことらしい。江戸時代を経ってきた人から聞いた話のうちに、床店から取り立てるのは損料の名に於てして、家賃とはいわなかったというのがあった）。

その次に弥兵衛は桜田の毛利家（長州萩藩）上屋敷に、一人扶持と二朱で、棟梁部屋の賄い兼掃除夫に雇われた。ここでは給金を半分とられない代り、取られたと同様の一分の半分の二朱であった。ところが掛り役の人が特に許してくれたので、屋敷のうちで酒・醬油・味噌・紙・墨筆・蠟燭などを売り、賄いと掃除とは人を雇ってやらせ、だいぶ具合がよくなつて行つた。かくて二十九の安政二年十月二日の夜半、激烈な地震に襲われ、命からがら逃げて出たが、被害甚大で元も子もなくなった。酒・醬油その他の問屋に借金が六十両そのときあったが、どこの問屋も弥兵衛に向つていうことは一つであった。

安政の大地震のときは、江戸府内五十九カ所から火が出て、四日間つづけて燃え、死傷十余万人ということになつてゐる。藤田東湖が圧死したのはこのとき。

弥兵衛に対してどの問屋もいう、天災だから未払い金（あきだま）のことは棚上げし、払えるときが来たら払って貰う、それまでは商品を註文次第にまわしますと、これを聞いて弥兵

衛は感泣した。ときに毛利家上屋敷は焼失を免がれたものの、邸内に全潰半潰の家屋もあり、潰れざるものも大破しているの、弥兵衛は取り片付け人夫を募つて、その世話役となり、いささかずつの口銭をとり、はじめは毛利家のための人夫七、八十人だけだったが、他の需めに応じるようになり、一時は三百人を使い、泊るところなき人夫のために、小屋を建てて合宿させ、その一方で壁づくり用のスサを古畳を刻んでつくり、コマイ竹を仕入れて売りなどしたが、江戸市街地の復興は二年で一段落がついたので、人夫を解散したところには、毛利邸とのつながりが切れていたので、房総地方に仕事を見つけに行つたが得るところがなく、伊豆の下田が開港地になるらしいと聞き込むと、運をひらきに下田に向つた。

江戸時代の問屋は、小売りのものが火災に罹ると、売掛け代金はひとまずそのままとして、商品を仕送つて回復に助力した。その代り問屋が火災にやられると、小売りは出来るだけ未払い金を都合してもつてゆき、その回復に助力した。火災保険がない時代だから、ことあるときの助け合いがかくは行われた。勿論これは不信の問屋と不信の小売りには、やりもせず、しても貰えないのはいうまでもない。火災保険が行われるようになってからは、今いったごとく助け合いの必要次第に薄れ、取引の中に温かきをもやがて失うにいたつた。この話は私よりずっと年長で、数代続く商家の主